

「熊本保健科学大学」



- 所在地／熊本市和泉325
- 用途／大学
- 事業主／学校法人銀杏学園
- 設計者／株式会社 佐藤総合計画
- 施工者／りんかい日産建設株式会社

「熊本市現代美術館」



- 所在地／熊本市上通町2-3
- 用途／美術館
- 事業主／熊本市
- 設計者／株式会社 梓設計
- 施工者／鹿島・戸田・増永・多々良・勝本建設工事共同企業体

「I-HOUSE」



- 所在地／熊本市小糸山町
- 用途／専用住宅
- 事業主／井手秀逸
- 設計者／横山俊祐+長野聖二・人間建築探険處
- 施工者／株式会社 三津野建設

第9回
くまもとアートポリス
推進賞

熊本県の都市文化及び建築文化等の振興を図るため、豊かな地域づくりに貢献した建築物や橋・公園などに贈られる「くまもとアートポリス推進賞」。9回目となる今回は、応募総数34件の中から推進賞3件、推進賞選賞1件が決定した。

推進賞を受賞した「熊本保健科学大学」は、直径132mの平屋建ての円形建築物。南西にあるアリーナ(体育館)だけが円形からはみ出す形となっており、その中を東西、南北にそれぞれ4本の通路が走り、あたかも一つの街をつくりだしたような構成になっている。また「びぶれす熊日会館」の中に設けられた「熊本市現代美術館」は、現代アートの作品を調和させた図書室という空間や、独創的な企画運営など、現代アートを市民の身近なものにしようとした積極的な試みが評価された。「I-HOUSE」は、ガラス、コンクリート、金属など異質な材料でできた「箱」を巧みに組み合わせた特徴を持つ住宅。

推進賞選賞には、中庭を隔てながらも変化に富んだ動線を確認し、三世代が仲良く楽しく暮らす都市型住宅を実現した「UEDA.Residence」が選ばれた。

「UEDA.Residence」



- 所在地／熊本市水前寺
- 用途／専用住宅
- 事業主／上田幸一、上田秀一
- 設計者／有限会社 森 繁・建築研究所
- 施工者／株式会社 山口工務店

第9回くまもとアートポリス推進賞選賞

第9回くまもとアートポリス推進賞

kumamoto
artpolis
news 29

ユニバーサルデザインとは。

ユニバーサルとは英語で「普遍的な、すべての」という意味です。障害、年齢、性別、国籍等、人が持つそれぞれの違いを超えて、すべての人が暮らしやすくなる。したがってユニバーサルデザインとは、製品、建物、環境を、あらゆる人が利用できるようにはじめから考えてデザインするという概念なのです。

特集

ユニバーサル
UNIVERSAL DESIGN
デザイン

なぜユニバーサルデザインが必要か。

個人の特性とはいつも同じであり続けることはありません。年齢を重ねていくことで、老眼になって若い頃は当たり前に見えていた小さい文字が読めなくなったり、小さな音が聞きづらくなります。女性であれば妊婦になって足元が見づらいと感じたり、男性も父親になって子どもを抱っこした時その重さに驚くことでしょうか。妊婦や子どもづれの人にとっては駅の階段の上り下りが苦しく感じられるに違いありません。また、一時的にけがをして松葉杖を使ったり、場合によっては車椅子を使うこともあるかもしれません。したがって、はじめからいろんな個人の特性を考慮してデザインしていれば、個人がどんな特性を持っていても柔軟に対応できるようになります。ユニバーサルデザインはそうした個人の特性に初めから目を向けたデザインであり、私たちにとって使いやすく、安全を約束するものなのです。

- 苓北町民ホール
日本建築学会賞受賞記念講演会
- くまもとアートポリス海外巡回展
- 進行プロジェクト
- 新規プロジェクト
- 第9回くまもとアートポリス推進賞



くまもとアートポリスニュース第29号 2004年3月発行



この印刷物は環境に配慮して、再生紙100%と大豆インキを使用しています。

特集

ユニバーサル

U N I V E R S A L D E S I G N

コミッショナー対談

コミッショナー 高橋 誠一 × バイスコミッショナー 伊東 豊雄

デザイン



「ユニバーサル」にこめられた 思いやりや優しさ

●高橋—僕はそもそもユニバーサルデザインなんてものはありえないと思っています。普通につくって普通に建てて。普通ということは、もう要するにハンディキャップの方たちも含んでいるわけです。

◆伊東—建築家は皆使いやすい建物をつくらうとして、さらにその上を目指しています。でも今ユニバーサルデザインが注目されているのは、今までそういうことが足りなかったということでしょうね。

●高橋—ソフトが先あって、インフラの整備をはじめ都市デザインそのものがユニバーサルデザインを目指していくことが大事なんです。人間そのものの考え方で都市デザインが良いものになるか悪いものになるか。そういう視点を大事にしていきたいと思うし、変えていかなければならない。それが建築側のフィジカルな問題でもあるのです。

◆伊東—ユニバーサルデザインという言葉の背後には、最終的には人間に対する思いやりとか優しさ、「人間は一つなんだよ」というメッセージがあると思うんです。ところがユニバーサルと英語になってしまえば、やっぱり20世紀の近代主義的な建築とどうしても結びついてしまっ…。アートポリスが現在目指している方向とはちょっと逆のイメージになってしまう。つまり近代主義世界では、どこでも同じ建築が再生産可能だ、という考えで、その結果意図的に大量の同じ建物をつくることになってしまったと思うんです。どこでも同じ、地域の特徴のない、そういう建物をつくることになってしまった。そのことをきちんと理解しなければ、ユニバーサルデザインということが単に段差がないとかそういうふうな単純に伝えられ、ローカリティーとは逆の方向へ行ってしまうかねない。時代を超えるローカリティーとは、そこでしかできないその場所だけの建物をつくっていくということ。私はいろいろな意味で、このローカリテ

ィーが大切だと思っています。どんな人たちが集まり、どんなプロセスを踏み、どんなものができてきたのか。そこが凄く大事なことだと思います。アートポリスではそういう建築が実現することを目指して、高橋先生と建築家の人選もしてきたし、まちづくりを考えてきました。

だれからも愛される建物、 それが「ユニバーサル」

◆伊東—本当の意味でのユニバーサルデザインとは、地域に対する思いの深さから生まれるもので、物理的な面とはあまり結びつかないんです。心ある建築家は、みなそれをわかってつくっていますよ。物を使う視点を少し考え直し、建築に対する姿勢までも問い直そうとしています。物によっては、存在理由そのものがユニバーサルなこともありえるので、人によっては、ユニバーサルという言葉はどう定義するかによって考え方も違ってきます。ユニバーサルという言葉は、よくグローバルゼーションという言葉とペアになって出てきますね。

●高橋—みんなに愛されている建築があるとする。それがユニバーサルじゃないの。20世紀のオフィス空間には、ユニバーサルが如実に象徴されていました。しかし、そのオフィスも今また変化しています。住宅のようなオフィス空間が生まれたり。もっと個性的でもっと自然に溢れた環境が生まれている。僕にとってユニバーサルってという言葉をきちんと解釈するとすれば、オフィスはこうとか、公共施設はこうとか、表層的な定義ではなく、もっと奥へ入り込んでもう一度見直すということだね。

◆伊東—そうですね。私も人間が「住む」という原点に戻るなら、現代のオフィスもその延長線上にあるべきだと思います。世界中の人たちが同じように住んでいるわけではなく、人はすべて違う風土の中で、風土が要求する状況の中で、生活を仕事をしていますからね。



地域特性を生かした優しさの創造

●高橋—最近は、音楽は劇場で聞くものだ、というような固定観念がなくなっている。例えば、音楽を駅の階段に座って聞くといったこともある。目的そのものが非常に多様化してきている。こちらがうかつに用意すると、誰も使わない。

◆伊東—建築家が考えているコミュニティの空間だったり、広場だったりする空間は、意外にも、そこで活動している人たちにとっては無味乾燥なものであったりするんですね。デザインされていない空間のほうが居心地が良かったりする、なんてことがままありますよね。

●高橋—ありますね。このごろストリートパフォーマンスが流行ってますけど、パフォーマンスを演じる人も聞く人も、駅の中。みんな自然に聞いてますよ。そういうのを見ていると、むしろ建物の中でユニバーサルデザインを目指すということが逆に危険なことに感じるね。

◆伊東—均質ではない優しさをどうやって創造していくか、ということが重要です。だからといって、雪国だからと庇の深い建物が必要かといえばそうじゃない。建物はその時代の制度とオーバーラップしてつくられてきたのであって、現在のように家族が個人として活動している今の時代には合わない。これからは、テクノロジーと自然とを組み合わせつつっていくという新しい発見をしていかなくてはならないと思うんです。そしてその発見こそが、新しい表現として形にならなければいけない。潮谷知事が言われているユニバーサルの意味もそこにあるのではないかと、思いますね。

●高橋—それは非常に難しいことだよ。新しい発見ってものは。

◆伊東—でもそこしかないと思います。なぜ、アートポリスが東京でなく熊本という地方で十年間行われてきたのか。十年前と今では建築に対する考え方が変わってきています。そのことを今、我々がどう受け止めて、どのような建築をつくることに反映させ

ていくかを探していくべきですね。

●高橋—そうだね。現在ようやく地域の中の特性を生かしながら新しい空間をつくらうとする意識が根付いた、ということでしょうか。建物において、みんなが見に来て楽しいという空間はとても大事。それは建物そのものの命を増幅させることですから。地域性を無視して世界に発信するユニバーサルデザインなんかありえないだよ。

話し合う「プロセス」がユニバーサルデザイン

◆伊東—ユニバーサルデザインというと、ほとんどが形式的な話に終始してますね。しかし本当は、形式主義の奥にあるものを探ることが本来のユニバーサルデザインの意味だと思う。ユニバーサルデザインの意味は、話し合うということ。話し合うというプロセスが問題であって、そこでどんな話し合いがあり、その結果どんな表現になったのか。意味はそこに尽きると思う。

●高橋—建築は、いかに住むかが根本にある。様々な条件の中でいかに生活するか、いかに利用していくかということが広がっていかなければならない。「建築はハウスだ」と思う。ハウスというものはものすごくファミリアなもの。ファミリアの中に心遣いもあるし。そういうものを社会に広めていく。その精神がその土地の中で育つことが大事なんだよ。建築をつくるということ自身が環境に対抗しているのです。だったらどうして100年も200年も持つ建築をつくらないのか。原始的な生活こそが循環型社会の基本で、できるだけ長持ちするものがある。アートポリスが住まいに戻れるような運動で、それがユニバーサルデザインというなら、大賛成だね。

◆伊東—県のユニバーサルデザインっていうのは、従来の建築をよりクオリティアップするためのスタンダードをつくっていく、ボトムアップ的な意味合いが強いと思います。一方、アートポリスは、もうひとつ根源にある意味、人が人として地球上に生活することを探っていくということに最大の価値を見いだすことではないか。これからはもっと話し合う機会を作り、その結果を実際の建築で試してみる、そんな試みとしてアートポリスがあるべきだというのがこれからの方向ではないかと思えます。近代主義の中で失われてしまった、よりプリミティブな人間のその土地でのふるまい方を、建築の中で、アートポリスのなかで、もう一度回復して探し出していくという方向が必要ですね。

●高橋—それは建築の本質だと思います。熊本は建

築の本質を見つめるということで、リーダーになることができる。歴史や土地柄などを反映した、熊本でしかできない、そういう個性やアイデンティティのあるものをつくるべきだと思います。それがくまもとアートポリスにおけるユニバーサルデザインではないでしょうか。伊東さんが関わった八代の博物館などに足を運んでもらって、多くの人にエンジョイしてもらおうことが大事。僕がつくったパークドーム熊本も、凄くユニークな格好をしているけど利用度が高い。僕たちはその地に密着した熊本らしい建築を目指していたから、そういう建物がつくれたのだと思うのです。

◆伊東—また、その建築をジャーナリストの人がどういうふうに伝えてくれるかということも大切ですね。そのジャーナリズムを通して県民の人にその建築の意味が浸透していくことは、時間がかかることだと思いますが、少なくとも熊本の建築家の人たちがどれだけ理解してくれているのかな。いろんな人と話していると、建築の意味が理解されるのは、これからだと思います。

PROFILE



くまもとアートポリス
コミッショナー
●建築家
高橋 誠一
TAKAHASHI TEIICHI

1924年 中国・青島生まれ/1949年 東京大学第二工学部建築学科卒業/1960年 第一工房設立・代表取締役/1967~95年 大阪芸術大学教授/1995年 大阪芸術大学名誉教授
[作品] 佐賀県立博物館/大阪芸術大学/東京都立大学キャンパス/全労済情報センター/パークドーム熊本/群馬県立館林美術館 ほか
[受賞] 日本建築学会賞(作品)(1971年・1982年)/芸術選奨文部大臣賞(1979年)/日本芸術院賞(1982年)/建築業協会賞(1992年・1997年) ほか



くまもとアートポリス
バイスコミッショナー
●建築家
伊東 豊雄
ITO TOYO

1941年 京城生まれ/1965年 東京大学工学部建築学科卒業/1965~69年 菊竹清訓建築設計事務所/1971年 URBOT設立/1979年 伊東豊雄建築設計事務所名称変更
[作品] 笠間の家/シルバーハット/八代市立博物館・未来の森ミュージアム/大館樹海ドーム/せんだいメディアテーク ほか
[受賞] 日本建築学会賞(作品)(1985年・2003年)/第33回毎日芸術賞(1992年)/芸術選奨文部大臣賞(1997年)/日本芸術院賞(1999年)/ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞(2002年) ほか



南 寛

〔熊本市現代美術館副館長〕

PROFILE

1957年長野県生まれ。いわき市立美術館、広島市現代美術館を立ち上げ、1991年より美術評論家、インデペンデント・キュレーターとして活躍。1993年、カルティエ現代美術財団の奨学金でフランスに留学。帰国後、女子美術大学講師などを経て、2000年4月より熊本市現代美術館を立ち上げるために来熊。専門は現代美術思想、旧共産圏の現代美術。国際美術評論家連盟理事。著書に評論集『豚と福音』など多数。

「バリア」、それはどこにあるの？

- 「バリアフリー」という言葉が世界にあふれることは豊かなことなのか。しかし、ハンセン病の元患者さんたちの入浴を拒むような事件を思うとき、本当の障害、つまり目に見えない差別や偏見、もっといえば隣人を見殺しても構わないという無関心こそ、私たちが向かい合わなければならない「バリア」ではないかと思うのだ。
- しかし、この近代にあって、建築はそうした見えない「障害」を生産し続けてきた「バリア」であり、あるいはまったくそうした「障害」に触れることを拒んできた、「無関心」そのものではなかったか。
- 目に見える不自由に自由を与えることは、そうむずかしいことではない。
- しかし、「さあ、スロープをつけてやっただろ」という態度は、すぐに見破られる。そして、それがどれだけ多くの人間を苦しめてきたか。
- 「バリアフリー」によって、ますます増長

- されるものは「バリア」そのものなのだ。
- スロープをつける前に、「段差がありますよ、ちょっと後を支えますね」といって、その通行に手を差し伸べられる人間が、なぜこの国に生まれなかったのか。
- 「障害」に触れることなく、「障害」を消し去ろうとする、暴力に満ちた「バリアフリー」世界。
- 世界は元来不自由で生きにくいものだと私は思う。しかし、建築はそのことに気づいていない。世界に傷も匂いもあってはならないと、いまだに信じ込んでいる。
- 「障害」は克服すべきものではなく、「共有」すべきものだ。
- すべてがその「障害」の中で平等となる場所。その創出こそが建築に求められている。
- 建築とはいうまでもなく、「人間」という言葉に置き換えられる。
- そして、「バリア」は「人間」の問題となる。



日比野 克彦

〔アーティスト〕

PROFILE

1958年岐阜市生まれ。東京芸術大学大学院修了。現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科助教授。1982年第3回日本グラフィック展大賞、1983年第30回ADC賞最高賞、1999年度毎日デザイン賞グランプリ受賞。1995年ベニスビエンナーレ参加。絵画、舞台美術、パブリックアートなど、多岐にわたる活躍。

透明人間

透明人間になれたら何処にでも行くことが出来る。電車も飛行機もタダで乗れる、映画もコンサートもチケットを予約しなくても入ることが出来る。秘密の会議も警備員に制止されることなく潜入出来る。全てがフリーパス!超VIP待遇!スーパーゴールドプラチナカードゲット!なのである!しかし問題がひとつ、それも悲劇的な問題が…。それは「誰も透明人間の存在に気がついてくれない、誰も透明人間を見てくれない、誰も透明人間に話し掛けてくれない、誰も透明人間に触れてくれない」ということ。

私は先日、ある人物から次のような依頼を受けた。【透明人間の衣装を制作してくれませんか?】。この命題は透明人間が着る服(つまり、昔の映画に出てくる、包帯グルグル巻き姿の姿)を制作するというのではなく、透明人間に見える服を制作してくれという命題である。これは難題である、見えないものを作らなくてはならない。しかし、そんな服が出来たら、好きな時にだけ透明人間になれば、悲劇的な問題は服を脱げば回避出来る。

透明ってどういうことだろう?子供の頃「色おにごっこ」という遊びがあった、おにが色を言う、みんなはその色のものを探して、それに触る、触っていないとおににタッチされてアウトになる。その遊びの中で、ある時間

題が起こった、おにが「透明!」とコールしたのである。みんなは一瞬戸惑い、尻尾の切れた風のようにクルクルと宛ても無く広場を走り回る、見えないものを探さなくてはならない、そして触らなくてはならないのである。そんな矛盾だらけの透明という言葉は、視覚だけの問題ではなく意識の問題に思考の領域を広げていった。

見えないから透明なのである。自分が透明かどうかは周りが決めることである。周りが見えないといえばその人は透明になる。

見えないから透明なのである。自分が透明かどうかは自分が決めることである。自分が周りが見えていない動作をすれば、その人は透明になる。

透明人間の衣装は誰もが持っているものなのである。都合によって着たり、脱いだりしているのである。

透明のお話しは、透明なだけに先が見えないのが絞れないねえー。見えにくいからといって目をそらしちゃったら悲劇が待っている。誰かに気がついて欲しい透明人間の衣装を着た人がそこに立っているのかも知れない。見えて欲しくないからといって透明人間の衣装を着たままでは悲劇がまっている。話し掛けたい相手を探している人がそこに立っているかも知れない。

みんなが参加して使う
「生きていく建物」づくり



●日時:平成15年7月18日 ●場所:芥北町民ホール

1999年12月以来、多くの住民がワークショップに参加してつくり上げた芥北町民ホールが、日本建築学会賞を受賞した。このプロジェクトを計画設計した阿部仁史・小野田泰明の両氏は、同賞受賞を記念する講演会で「建築とは「生きていく建物」を創ること。図面を引くだけでなく、皆さんが参加し、使っていくことも建築の過程。完成後も常に「工事中」だと考えている」と語る。

町のコミュニティネットワークをつなぐポイント

◎阿部 拡大・成長という言葉が、縮小・成熟へパラダイムシフトしている現在、今まで地縁や土地により定着させていた自分の所属意識はどうなるのでしょうか。

◎小野田 建築的かつ都市デザイン的なアプローチの可能性を考えてみると、もう一度個人に立ち返ってみること。私たち一人ひとりがコミュニケーションを取る場合に、さまざまな媒体=世界を設置することで。コミュニケーションの基盤は、家族、行政機構や学校、経済機構、マスコミなどの公の機構。それらを合わせて新たな媒体を制作し、私たちが情報やモノなどをやり取りする必要があります。

◎阿部 芥北町は少子高齢化による過疎が進んでいますが、財政的には余裕があります。そこで、若者が戻ってくる町を目標に、お年寄りや若者の年代の溝を埋めるためのコミュニケーション施設を建てることにしました。また、この場所は裏に役場や小学校があり、

主要道路に面しているなど、町のコミュニティ・ネットワークを繋ぐポイント地点。この条件から、それぞれの公共施設をまとめて何かが出来るのではないかと思います。

町民ホールを中心としたネットワークづくり

◎阿部 今の時代、縁は経験の共有で結ばれていくので、この建物では様々なイベントや活動をするスペースを設けました。ここでは、主役は町の人であり、町の人が自分を発信する場所です。また、集会室と和室は間仕切りを取れば発表会にも使えるオープンな造りで、その活動を多くの人に見てもらえます。ホールの扉は両側を外に大きく開けることが出来るので、多様性のある使い方が出来ます。もちろん、イベント以外でもベンチとして普段から使ってもらおうと考えています。また、この施設と他の建物との違いは、場所の可能性を自由に広げられるところ。各所に曲面があるシェル構造を採用しているため、人が建物に束縛されず、自由な使い方をするのにとても有利です。建物は使い方を強要するのではなく、いろいろな人の興味や想像力をかきたて、その想像力の数だけ使い方の可能性を秘めたものであるべきだと思います。

◎小野田 今までの建築は機能の設定に合わせてつくられてきましたが、本来は皆さんと一緒に考えていくべきで、そのためにはワークショップなどを通じて多くの人に参加してもらうことが大切です。建物は基本的に終わらないもの。建物を使うことで新たな発見があり、それにより建物も変わっていくべきです。皆さんも様々な使い方で建物を育ててください。

くまもと
アートポリス
海外巡回展開催

●主催/国際交流基金



7000人が訪れたブラジル美術館のくまもとアートポリス海外巡回展
撮影:Fernando Silveira/FAAP(2点とも)

平成15年11月18日から12月14日にかけて、ブラジル・サンパウロ市のアルマンド・アルヴァレス・ベンテアード財団ブラジル美術館において、国際交流基金主催の「くまもとアートポリス巡回展」が開催された。この展覧会では、熊本北署や県営保田窪第一団地、八代市立博物館・未来の森ミュージアム、そして牛深ハイヤ大橋など県内各地のアートポリス作品の70点近くをパネル写真で紹介。入り口には潮谷義子県知事のメッセージや熊本県全図も展示された。期間中は熊本県出身者をはじめとする日系人、学生や建築関係者など約7,000人の入場者が訪れた。

「アルマンド・アルヴァレス・ベンテアード財団は、子供たちのために芸術学科を開設し、ブラジル芸術の保護と発展を目的とした美術館を設立するために創設された財団です」と語るのはブラジル美術館館長マリア・イザベル・ブランコ・リベイロ氏。さらに「今回の展覧会では当財団で学ぶ学生たちがペンを取り、パネル前で教授と議論する光景がよく見られました。熊本の現代建築のみならず、熊本



サンパウロ市にあるブラジル美術館

世界へ発信
される
アートポリス

の街や人々をも知る機会を得たことは、学生たちにとって非常に有意義だった」とのメッセージを寄せている。

くまもとアートポリスではこれまで、熊本国際建築展を開催し、建築を通じて世界各国と交流を図ってきたが、今回のように世界各地を巡回する展覧会は初めて。今後、数年かけて世界各地で開催されることになっている。ブラジルの後には、アメリカ・モンタナ州ヘレナ市の熊本プラザ(熊本県モンタナ事務所)、ワシントン州シアトル市の全米建築協会シアトル支部内ギャラリー、コロラド州デンバー市のコロラド大学デンバー校建築学部を巡回し、アートポリスの理念を世界に紹介する契機となった。来場者からは「(北署のパネルを前に)これが本当に警察?」「建物だけでなく、橋や彫刻作品なども含まれ充実している」「シアトルや東京もこのような概念に倣った建築を」などの感想が寄せられ、従来の伝統的文化紹介では見せ得なかった熊本の「もうひとつの顔」を伝えることができた。

八代市の新しい風景 光を取り込むモニュメント



進行プロジェクト **16年2月竣工**

新八代駅前モニュメント —きらり—

市街地から少し離れた田園風景の中に今春開業予定の九州新幹線の新駅舎が建築されているが、鹿児島本線と九州新幹線が交差するその駅前に設置されるモニュメントづくりに取り組んでいる。制作に当たっては、単なるモニュメントにとどまらないものを目指した。

それは、駅前広場の中で“あずまや”として利用することもできるものだ。高さ6m、10m×8mほどの大きさの三角形の勾配屋根。そうした家のような形をしたマッスに、大小さまざまな大きさの正方形の穴をあけ、内部空間に外光を取り入れた。壁と屋根の構造は鉄筋で補強したコンクリートだが、ガラス繊維を練り込んでコンクリートそのものに強度を付加。通常のコンクリートに比べて極端に壁厚が薄いものになっている。壁の大部分は工場でプレキャストし、現場で継ぎ目を打設している。屋根はすべてを現場打ちで施工。継ぎ目のない



一体感のあるモニュメントにするため、壁と屋根には構造的な継ぎ目をなくしている。そのかわり、基礎とモニュメントとの間に滑りやすいステンレス板を挟み、基礎に対してモニュメントが完全に拘束されないようにしている。遠くからだとまわりの普通の民家のひとつに見間違えてしまうぐらいの質感だが、近づいてみると建築的なディテールがなく紙細工のように軽やかな外観に見える。そんな、見る位置によってイメージがガラリと変化するようなものになればよいと思っている。

建築家●PROFILE



乾 久美子

Inui Kumiko

1992年東京芸術大学美術学部建築科卒業、1995年Wendy Elizabeth Blanning賞受賞、1996年William Wirt Winchester奨学金授与、イェール大学大学院建築学部卒業、青木淳建築計画事務所勤務、2000年乾久美子建築設計事務所設立。東京芸術大学美術学部建築科常勤助手、2001年京都造形芸術大学通信教育学部建築科非常勤講師

●主な作品
ルイ・ヴィトン高知店
ヨーガンレール丸の内店

阿蘇の大自然に溶け込む建物



進行プロジェクト **16年3月竣工**

一の宮町農産物直売所 —四季彩いちのみや—

阿蘇山や外輪山を一望できるロケーションを縁取る緑の杜のように、敷地全体を公園として捉え、阿蘇らしい自然の溢れる公園のなかに建物を溶け込ませる…。

ワークショップで培われたコンセプトをもとに、昨年完成した“阿蘇ものがたり”ブランドを生産する加工場と、そのつくりたての商品や一の宮特産の野菜やお米が販売される直売所、そして公園のトイレなど付帯施設が阿蘇山に面して計画された。将来町民とともに練られた文化施設や湧き水を生かした公園なども計画される予定があり、その整備が待たれるところである。

加工場と同じ鉄骨と木材のハイブリッド構法を踏襲しながら、曲面壁の厨房をコアにレストランと店舗エリアを自由に開放的な空間にすることで、南面のガラス越しに広がる阿蘇のパノラマを来訪者の記憶にとどめるように展開している。北側の高窓から



の柔らかな光と白い壁、阿蘇の名産品であるトマトをイメージした赤い厨房、杉角材を敷き詰めた繊細で優しい天井のコントラストが明るく賑わいのある空間を導く。

白く縁取られた庇から白い壁面に影をひく加工場、スライドして配置された2枚の壁と浮き屋根をもつトイレ、木壁や白い壁、開放的なガラスファサードを持つ直売所などを縦走的に配置させ、変化しながら軽やかに伸びる白い屋根群とその光と影のグラデーションが、四季折々に変化する阿蘇の山並みを際立たせることを狙っている。

建築家●PROFILE



岡部 憲明

Okabe Noriaki

1947年 静岡県生まれ、1974年 ポンビドゥーセンター、IRCAM設計・建設に従事、1981~89年RPBWJのチーフアーキテクト、1988年関空ターミナル国際コンペ優勝、RPBWJ設立、代表、1994年岡部憲明アーキテクトネットワーク設立、主宰、1996年神戸芸術工科大学教授

●主な作品
関西国際空港旅客ターミナルビル、牛深ハイパ橋

進行プロジェクト **16年3月竣工**

清和郷土料理館

建築家:石井和紘



文楽の人形を建築に応用する

清和郷土料理館で行われるのは「文楽のディナーショー」。平土間に食卓を並べ、清和村の産物を使った郷土料理を味わいながら文楽を楽しんでもらう。その空間を、清和村産の杉を使った建物でプロデュースするのが、この建築のコンセプトだ。屋根を支える丸太は、糸でゆるやかにつながって動く文楽人形の腕や足の関節がモチーフである。今回で文楽邑の建物は3棟目。石井氏は「これらの建物は清和村の文楽という『財産』が本物である証拠。熊本県にはまだ埋もれている財産があり、上手い活用法を考えれば活性化するものがあると思う。新しいものだけでなく、古びていくものにももっと目を向けて欲しい」と述べる。

進行プロジェクト **16年7月竣工**

砥用町林業総合センター

建築家:西沢大良



杉材活用の先駆けとなる建物

「戦後の植林行政によって現在日本全国に多量にある杉に対しては、例えば構造体を使用するなど幅広い活用法を見つけていかなければならない。仕上材としての利用だけでなく消費するのは難しいから」と語る西沢氏。砥用町林業総合センターでは、コンクリートを使用せず、杉とスチールだけで建物をつくる。「今までは不可能であった20mスパンを杉材で架構。通常の住宅の構造と同じような細かい各部材を特殊な方法でジョイントすることにより20mスパンの無柱空間を確保しました。このような前例のない構造が今後の杉材活用法の先駆けとなり、砥用町の石橋のように未永く町の人の記憶に残る建物になって欲しいですね」。

進行プロジェクト **17年3月竣工**

南小国町営 杉田・矢津田団地

建築家:片山和俊



古き良き日本の姿を残す団地に

既存の団地の建替えというこのプロジェクトにおいて重要なのは、「長年そこで暮らしてきた住民が、そのまま同じ生活環境を保つことでした」と述べる片山氏。住民の方々からの要望であった「これまでの近隣関係を壊さない」団地づくりのため、建物と建物の間に路地を設け、そこを抜けると、また別の建物に行くことができる京都の町屋のような構造である。「隣へ続く階段下や屋根の下で住民たちが立ち止まっておしゃべりをしたり、縁台を出してお年寄りがのんびりとくつろぎ、その周辺を子供たちが遊びまわる。古き良き日本の姿が矢津田団地と杉田団地に残り、南小国町の印象をこの二つの団地が象徴するような存在になればと思っています」。

新規プロジェクト

熊本県立菊池高等学校

シーラカンス アンド アソシエイツ 代表取締役 小嶋一浩
SDA建築設計事務所 代表取締役 牧野裕三
ライト設計 代表取締役 今坂晋典



写真左から、今坂氏、菊池高校校長、小嶋氏、牧野氏



対話やプロセスを重視しながら、わくわくする気持ちを持続させたい

2月24日、設計を担当する小嶋一浩氏、牧野裕三氏、今坂晋典氏の3人が、熊本県立菊池高等学校を訪れた。

小嶋氏は、菊池の街の印象を「時間が折りたたまれている場所」と表現する。「市街地にある菊池高校は、周囲の街並みと切り離しては考えられないと思います。学校はもっと街に溶け込んでいいのでは。快適な空間は皆に共通しているはずだから、あまり特別な場所をつくるんだと思わない方がいい。少子化が進んでであろう50年先を予測し、校舎の空きスペースの活用法も視野に入れながら、学校と街がもっと親密になれる建物をつくりたい」。

また、近年、全国の小・中・高校で取り入れられ始めたエコスクールや公共建築に求められるユニバーサルデザインの視点について小嶋氏は「エコスクールは、メカニカルな

対応も大切だが、日当たりなど素朴なことをきちんとやっていきたい。ユニバーサルデザインの視点という、ただ建物を真っ平にして点字ブロックやスロープなどの設備を取り入れてしまうことには、とても違和感を感じます。ある部分は合理性がなくなってマニアックになってしまう。対話やプロセスを重視しながら、ユーザーの思いをきちっと見きわめていくことが大切です」。

牧野氏は、今回の抱負を「高校のグラウンドが民家のすぐそばまで迫っていることに驚きました。校舎をどう配置するかが大変だけど、面白そう。建物を使う人に愛着を持ってもらえる建物にしたい」。また、今坂氏は、「エコスクールに関しては、施設面、教育面を一体化できればいいと思う。市民のみなさんとともにこのプロジェクトに取り組んでいきたいですね」と、意気込みを語った。